

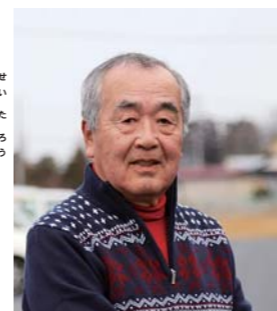
登米から 目指す復興

南方は「第2の古里」

震災時は、妻と自宅におり、揺れの強さから大津波が来ると感じました。チリ地震の津波体験から近所の高齢者と共に、急いで高台に避難しました。

震災後4カ月間は、富谷町の長男夫婦のもとで生活しました。南三陸町内の仮設を希望しましたが、抽選に漏れ南方仮設へ。11年8月に入居しました。南方は、南三陸町全域からの入居、隣町とはいえない知らない土地、同じ町とはいえない知らない人たちが、非常に不安でした。

不安は的中。入居者同士の付き合いは、なかなか進みません。それを助けてくれたのが登米市の皆さんでした。行事などでここに来た際に、皆さんが間にいることで、入居者同士の会話も活発になりました。



佐藤清太郎さん(72)
南方2期仮設住宅自治会長

1943年南三陸町生まれ。高校卒業後、62年に郵政省へ入省。退職まで、本吉郡内の郵便局で、地域に根ざした業務に従事する。退職後、十の行政区長を、南方2期仮設住宅入居時から、自治会長を務める。本年4月末に南三陸町に帰郷予定。妻と2人暮らし

なりました。登米市の皆さんが私たちの「心の接着剤」になったのです。多くの皆さんが、物心両面で支えてくれました。本当に感謝しきれません。中でも、足しげく通ってくれた、南方小の子どもたち。彼らの明るさと無邪気さが、私たちに前向きにしてくれました。あんなに不安だったここでの生活。今では心の底から「南方でよかった」と思っています。

現在、南三陸町内に自宅を建設。4月末には転居予定です。多くの皆さんの優しさに触れ、心が通いあった南方は私たちの「第2の古里」。復興への道のりはまだまだ遠く、時間がかかります。ちよっと疲れたときには「第2の古里」で休ませてください。

南方仮設 × 南方小



今年も子どもたちはコメを持って、南方仮設住宅を訪れました。子どもたちが届けているのは「思い」の詰まったコメ。その思いが伝わるからこそ、被災者の喜びは2倍にも3倍にもなるのだろう。

自分たちのできることを

11年3月11日は、私にとっても忘れられない日になりました。当時、志津川小に勤務しており、初めて津波を体験しました。被災直後、南方小への転勤が決まり、「志津川小の子どもたちに何もしてあげられなかった」という思いがありました。このようなことから、自分たちにできる支援は何かと考えていました。

当時受け持っていた5年生は、総合学習でコメづくりを予定していました。それまでは収穫したコメを、海外の恵まれた国に送っていました。しかし、目の前で大変な思いをしている南方仮設住宅の皆さんに贈れないかと考えました。子どもたちに意見を求めたところ「南三陸の人たちに贈ろう」とみんな賛成してくれました。

佐藤区長をはじめとする多くの皆さんに協力をいただき、仮設住宅で一軒一軒コメを直接手渡しました。みんな喜んでもらえ、中には感激して涙を流す人もいました。

「子どもたちが苦労して作ったコメを贈ってくれたその気持ちに對しての喜びだと、子どもたちは感じていました。それ以来「自分たちの行動が被災者への支援になる」と、行動にも少しずつ良い変化が見えてきました。それから5年間、毎年欠かさずコメを届けています。

復興までは時間がかかります。これからも子どもたちと一緒に、被災者の皆さんを支える活動をしていきたいと考えています。

武田香代子さん(43)
東和町米川第2区在住



1972年登米町生まれ。大学卒業後、95年から教員となり、2005年度から07年度まで入谷小、08年度から10年度まで志津川小でと、6年間南三陸町で教鞭をとった。11年4月から南方小へ転勤し現在に至る。家族は夫、長女、次女、三女、父、母の7人暮らし。

そばに

特集

最近、この生活に慣れた人が多くなりました。しかし、仮設住宅に住んでいること自体、平時ではありませぬ。私は農業を営んでいます。第1次産業の収入が、震災前に戻ってやっと「復旧」ではないかと思えます。

震災時は、登米市で花を仕入れていました。激しい揺れだったので、大津波が来ると確信。すぐに家族へ連絡をしましたが、結果的に、家族全員無事でした。しかし、全員と顔を合わせるまで1週間かかり、それまでは不安でした。

私たち中瀬地区民は、1次避難から仮設住宅に入居するまで、ずっと行動を共にしています。震災以降、出会った人たちに恵まれたおかげで、離れずにいられるのだと感じています。

2次避難は東和町鱒淵地区でした。自分たちで希望した場所でしたが、見知らぬ土地なので不安は大きかったです。しかし余計な心配でした。鱒淵地区の人たちは、腫れ物を触るではなく、最初からごく普通に接してくれました。同じ地域の仲間として、お付き合いしてくれました。逆の立場になったとき、同じことができるのだろうかと思っただけです。

また、鱒淵ではRQ市民災害ボランティアセンターの皆さんにも大変お世話になりました。鱒淵を離れてから4年以上たちますが、鱒淵、RQ、中瀬の交流は続いています。復興のその日が来たら、みんなで喜びを分かち合いたいと思います。

普段づきあい感謝



佐藤徳郎さん(64)
中瀬地区自治会長

1951年南三陸町生まれ。妻が津山町出身で登米市との所縁は深い。震災前はキクを栽培し、ハウス千坪、露地30%を経営。震災の影響でキク栽培を断念し、現在はハウスを建設し、ホウレン草を栽培。中瀬行政区長の職に就いて10年目。家族は妻、長男夫婦、次女の5人

中瀬地区 × 鱒淵地区

11年8月4日、鱒淵避難所退所式の際に、中瀬地区、RQ、鱒淵地区全員で撮影した記念写真。この写真は1米程度にまで引き伸ばされ、中瀬地区仮設住宅の集会所に飾られている。3団体の4カ月間の思いが詰まった最高の一枚。

中瀬は「同じ地域の仲間」

震災発生から3週間。身の回りの片づけにめどがついた頃、中瀬地区120人が旧鱒淵小に避難してきました。受け入れ前、地域の人たちと「被災者」とどのように接したらよいのか。何をしたらあげればよいのか」と話し合いました。その結果、あえて特別なことをせず、普通に接して、自分たちにできることをやろうと決めました。

南三陸町は、親類や知人が多い地域。4カ月という長い期間、特別扱いしては、お互いに気疲れしてしまいます。飾ることなく、普段通りが一番の支援だという結論に達しました。その判断は、間違いでなかったと感じています。

こちらに避難してから、多くの人たちが地区内を歩いていました。「足腰がだめになるからね」と散歩をしていたのです。その多くが、この間まで、農業や漁業などで体を動かしていた人たち。これではいけないと、ホテル会館前の畑を解放、「復興支援農園」として、中瀬、鱒淵地区民が共同で作業をしました。

この作業を通じて、心と体の健康増進、そして「同じ地域の仲間」という意識が高まり、現在の関係につながっています。

また避難生活を語る上で欠かせないのが「RQ」の皆さん。私たちが大変お世話になりました。現在、中瀬、RQ、鱒淵の有志で「ニューふるさと会」を結成。無理のない形で、細く長く付き合える活動をしています。この付き合いは一生ですから。



小野寺寛一さん(73)
米川第9行政区長

1942年東和町米川第9区出身。高校卒業後、家業の農業を継ぎ、青年団など地域活動に力を入れる。71年から東和町役場に勤務。特に、社会教育分野で力を発揮する。2002年に定年退職し、登米市議会議員を務めた。現在は県アーチェリー協会会長を務める。妻と2人暮らし

※ RQ市民災害ボランティアセンター：災害時に被災者を支援する東京都荒川区に本拠を置くボランティア団体

